

が、仮りに概念態と人格態という観点から絶対他力の宗教信仰が後者の路線にあることを考えた。そしてそれが真実の在り方において親鸞において存在するものと考え、そこに悪の問題を取りあげてみた。しかしかかる問題の決着点は念仏にあることは今更言を俟たぬ次第であるが、本稿の筆者は之れに接近することも不可能であったと思われる。蓋し「念仏には無義をもて義とす。不可称、不可説、不可思議のゆへにと、おほせさふらひき」（歎異抄十）といわれてあることを想起するならば、本稿は戯論に終始したことになるからである。伏して寛恕を乞うのみである。

合掌

浄土真宗

広瀬 杲

△本師源空は仏教に明らかにして 善悪の凡夫人を憐愍したもう……、と▽

あまりにも大きく深い人間の課題を、ここに答え尽された法然上人の、鋭利な決断と直截な唱道とをおも。それは、仏道にこそざし、ただ一すじに仏道をあゆまれた上人が、敢えて、菩提心を無要とし、廻向を用いず、行修の功をのぞむことなき、専称仏名の道を唱道された事実である。

たしかにそれは、過去二千年の仏教への、主体的な袂別であった。しかし、この袂別のうちに、かぎりなく深い慈愛の涙が秘められてあったことを、誰がよく知り得たであろうか。菩提心を無要として仏道はなく、廻向を用いずして自然に成るところに行はない。されば『摧邪輪』の作者はいう「天魔波旬となすべきや。諸仏の怨敵というに非ずや」と。しかし、その道理を誰よりも熟知していたのは、上人そのひとに外ならなかった。

されば、菩提心を無要といい、廻向を用いずして自然に成る往生業を行とする浄土宗を、独立せしめようと思いついたとき、上人は二千年の仏教とともに、敢えて死を決意されたのではなかったか。自らの死を決意することによって、古き仏教の死を宣言したのではなかったか。「聖道浄土の二門を立つる意は、聖道を捨てて、浄土門に入らしめんがためなり」という宣言のうちに、古き仏の死が白日にさらされたのである。

「三恒河沙の諸仏の 出世のみもとにありしとき 大菩提心おこせども 自力かなわで流転せり」と親鸞は述懐する。しかし、この悲しみを、ひと知れず自らに眩きながら、二千年を流転してきた仏教の歴史があった。二千年の仏道の事実は、遙かなる師を仰ぎ見て菩提心をおこしつつも、ついに自力かなわで流転し続けてきたいたましい外真内仮の連続、そして、遠く仏の在世に生きる舍利弗・目連を羨みつつ、その生を終らねばならなかった遺弟の悲歎の声とともにあった。自ら無疵のままに死を宣告するには、この事実は余りにも大き過ぎる。法然上人は一生不犯の威儀を破ることなき仏弟子であった。その仏弟子が菩提心無要にして不廻向なる行を唱道したとき、上人は外真内仮の流転の歴史を包む二千年の仏教とともに、死ぬことを決せられたのであろう。そして、安んじて死に切られたのである。一切の毀誉にかかわることなく……。

しかし、なにが上人をして死を決せしめたのか。それこそ、自力流転の歴史の底から、開かれてきた本願他力の道が明らかなるにも拘らず、「ほとけの本願をば疑わねども、わがこころの悪ければ往生はかなわじ」と悩み「弥陀の本願力というとも、煩惱罪惡の凡夫をば、いかでかたすけたもうべき」と、自らの宿業を思いわずらわねばならぬ大衆への、かぎりなき悲心であった。この善惡に悩む凡夫人の、いたましき心を思うとき、上人は、古き仏教の歴史に終止符を打たねばならぬことを感じ、ついに、聖道門学見の人びとをして「二河譬」の群賊に擬することとなったのである。

されど、安んじて死することは、永遠の生の発見者にして、始めてできることであった。善惡の宿業に苦悩する凡夫人に、その身をもって、いや、仏教の長き歴史を断つことをもって、真に自力の無効なることを公示された上人の教えに感泣し、その言下に「いづれの行もおよびがたき」わが身を信じた親鸞は、師上人の安らかな死の秘密を「像末五濁の世となりて 釈迦の遺教かくれしむ 弥陀の悲願ひろまりて 念仏往生さかりなり」と深くも領いたのである。そこに、菩提心無要といひ切られた言葉のうちから、浄土の大菩提心を教えられ、不廻向の行において、本願力の廻向を感得した。

そして、その道は、「自力無効」にして「必定の菩薩」の位におかれ、「いづれの行もおよびがたく」して、「第一希有の行」を行ずる身とならしめられる、無碍の一道であった。まことに、ただこの「よきひとのおおせ」のなかから、新しい仏教の歴史が、久遠の真実をうちに統攝して、歩み出されたのである。